

## 1.2 渡米、カリフォルニア、与えられていた道

そんなに簡単に建築設計の仕事が見つかるとは思っていなかったし、英語も急に上達するとは思っていなかったが、日が経つにつれてあせりが出てきた。

日本では大学の学科長と、推薦状を無断で取り下げられたことで口論となり、「私は学科長の推薦状などなくても世界一流の大学院に入ってみせます。又、世界一流の建築設計事務所で働いてみせます。」と大きなタンカをきってとび出してきた。羽田空港では、後輩の学生達が「井上さん大きくはばたけ！」という大きな垂れ幕を作って、空港のデッキで見送ってくれた。私にはそれらのことが重荷になってきた。それに、「2年で帰ってくる」と、親友のなおみに約束してきたが、いったい2年で何をやる事が出来るのだろうか？まったく先が見えない。これからどうしようと毎日悩んでいた。



ゴールデンゲートブリッジ

いつも美しく晴れた青空、あざやかに咲きみだれている花々、サンフランシスコ湾の霧のかなた見えるゴールデンゲート・ブリッジ、すべてが美しいものばかりだが、とても美しいとは感じる余裕がなくなっていた。こんな美しい環境の中での生活は、楽しいはずなのだが、逆にそれらを見るのが何かつらかった。

野村さん夫婦は大変親切であった。そして私にキリスト教を信じさせ様と努力した。神を信じることによって私の人生が救われるとの事であった。7月のある日、「どうですか井上さん、この夏ロスアンゼルスで、日系人のキリスト教会の集まりがあります。カリフォルニア全土から日系人の信者が集まるし、日本から牧師や伝道師も来ます。ロスアンゼルスの郊外のキャンプ場での楽しい集まりです。私はこの機会に、子供たちをディズニーランドに連れて行きます。井上さんも、大きな街、ロスアンゼルスだったら建築設計の仕事が見つかると思います。一緒に行ってみませんか？」と誘ってくれた。

英語の学校も夏休みに入るし、行って見ることにした。私の日本での建築の作品集を持って野村さんの大きな車に乗せていただき、彼の家族とロスに向かった。

カリフォルニアの夏はまったく雨が降らないので、フリーウェイに沿って、波うつ様な、そして、なめらかに日焼けした肌色の裸体を思わせる様な、薄い茶色の山並が単調に続いた。カリフォルニアののんびりした生活を思わせる様なランドスケープであった。

ロスの郊外にある大きなキャンプ場に着くと、カリフォルニア全土から集まった日系人や、日本語を話す信者や、誘われてきた若者が集まっていた。日本では、自称、アメリカのキリ

スト教伝道師のビリー・グラハムという本田牧師が日本から来ていた。1人でも多くの信者をつくろうと努力をして、余興等までして若い人達に説教した。心理的な圧迫も受け、多少強制的にキリスト教信じさせようとも感じられた。神を信じない人は、良くない人間で、信じる者は救われると説教した。自分の能力と行動力を頼りに生きてきた私にとっては、人間でないキリストの存在を受け入れ信じなければならないことは私にとっては大きな矛盾であった。“これがキリスト教ですか？”と反発し、野村さんと議論となった。とんだ反逆児を連れてきてしまったと思ったことだろう。野村さん夫婦には、すまないと後で思った。

しかし他に、日本から来た若い赤城牧師は、日本の第二次世界大戦の戦争犯罪の反省等をテーマに話した。その戦争によって、すべての日系人が強制収容所に入れられた。しかし、このことに関して、日本の政府や日本人は何も反省していない。世界に対して罪の意識がまったくない、等のことを彼は説教した。私はこの牧師に大変好感を持った。

夜になって、この牧師をまじえて、若者たちが集まって、日本の戦争犯罪や、ベトナム戦争の罪、そして人間はいかに生きるか等を話し合った。何かを求めてアメリカにやってきた人達がほとんどであった。アメリカと日本の価値観やモラルの違いに悩んでいた。そして生きる方向性を失っていた人が多かった。

私は建築の修業と自由な生き方を求めてアメリカに来た。新しいスタイルの建築をつくり、文化の遺産として後世に残る様な仕事をしたい、という大きな夢をもっていた。しかし、所詮、建築は私にとって生きる為の手段にしかすぎないのかもしれない。今、何も出来ず、お互いに悩みを話し合ったり、慰めあったりしても、何の解決にもならない。方向性を見つけることさえも出来ないでいた。本当に神を信じることによって、道は開けるのかと思ったりした。



アメリカ西海岸地図

このキリスト教の修養会の合い間に、ロスアンゼルス新聞の求人欄を見て、私はロスアンゼルスの街へ仕事を探しに出かけた。バスを何度か乗り換えていくつかの事務所を訪ねた。自分の作品集を見せながらの面接であった。

1つの設計事務所で面接を受け、2、3日中に大きなプロジェクトが入るかどうかが、はっきりする、ということなので、ロスアンゼルスに住んでいる日系人の牧師の家にお世話になった。しかし、結局、仕事は得られなかった。

地図を見ながら、広いロスアンゼルスの街をバスに乗って、設計事務所をさがして、面接に行くことは容易ではない。又、広いロスアンゼルスの街の中に建っている建築物も、私が求めている様な建築物は、当時は何も見あたらなかった。これ以上ロスアンゼルスの街で仕事をさがすことは、私の生きる方向ではないと思い、とりあえずバークレーにもどって考えようと思った。

私はグレーハンドのバスに乗って北上し、バークレーに向かった。バスの中で、私は考えた。これからどうしよう？金もだんだんなくなってくるし、ビザの期間も少なくなってくる。カリフォルニアの人達は親切だが、私はここにいてもどうしようもない。動きがとれなくなるばかりだ。もっと大きな密度の高い街、ニューヨークに行こう。もっとチャンスはあるはずだと思った。アメリカで生活し、仕事を得る難しさや、生活の厳しさがわかってくると、この大きなアメリカ大陸を西部から東部に移動する決断を下すには、勇気がいった。本当に今度は誰も知らない街へ行くのである。しかし、このニューヨークへ行くという道は、私が選んだ様に思えるけれど、実は以前から神らしき者が、私の宿命として私に与えられていた道なのだ、と自分に言い寄せた。バスの中で自分を何度も何度も説得し続け、今の私には失うものは何もない、「やるしかない」、とニューヨーク行きを決心した。本当のところ恐ろしくてこうでも考えないと、私は決心出来なかったのである。



ゴールデンゲートブリッジの夕景